

神戸大学  
教養部

# 広報



特集:大学改革を考える

No.79

平成3年(1991)10月15日

教養部広報委員会

## 目 次

—巻頭言—	堀 信 夫 (1)
—教養部オリエンテーション講演要旨( '91. 4.10) —	
日本の国際化と人権	金 東 勲 (2)
—別れのことば—	
神戸大学での4年間	中 井 達 (4)
OUR YEAR IN KOBE	M. Zabarsky (5)
—弔辞—	
故中川保雄教授を偲んで	横 山 雅 彦 (6)
—新任教官紹介—	(7)
—教養部のうごき—人事異動	(10)
—新任事務官紹介—	(11)
—図書館だより—	
ニュートンから「銀河英雄伝説」まで	(13)
—特集— 大学改革を考える	
1) 「大綱化」とはなにか	滝 上 凱 令 (15)
2) 座談会「21世紀の大学をめざして」	(16)
—教職員研修会の報告—	(27)
—自治会との交渉記録—	(27)
—二課程関係の話し合いの記録—	(33)

表紙題字 長 岡 美和子  
表紙写真「新入生歓迎レセプション」 国 友 正 和

## —巻頭言—

## 想 像 る

堀 信 夫



最近ではあまり見かけなくなった用字法だが、「想像る」と書いてあった場合、何と読めばよいだろうか。正解は「おもいやる」。これは決して宛字や判じ物ではない。辞書類に正式に登録されている用字法である。室町時代から江戸時代にかけて行われた国語辞典『節用集』（現在の『広辞苑』のようなもの）にも「想像、憶遣」（黒本本）、「想像、憶遣」（伊京集）、「想像、憶遣」（天正本）、「想像、饅頭屋本）、「思遣、想像」（易林本）、「想像、遣悶」（書言字考）などがある。

「おもいやる」は、現代の国語辞典類でもこの二義が採用され、「①恋愛・心配事などのため、陥っている重苦しい気持ちを追い払う。心を慰める。憂いを紛らす。②眼前にない人や物に思いをはせる」などと解説されている。用例から見ると、①は古代が中心で、現代は使われていない。一方、②は古代から現代まで常用されている。一例をあげると、かの『源氏物語』桐壺巻で、まだ頑是ない光源氏を里の祖母大宮に預けた帝の様子が、「いはけなき人を、いかにとおもひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかさを…」と記述されている。手許に置かぬいとし子を遠く「おもひやる」親の心情が切々と伝わって来る条である。このとき、帝は大宮に有名な次の歌を贈った

宮城野の露吹きむすぶ風の音に  
小萩がもとを思ひこそやれ

思いやるのは、なにも遠く離れている対象とは限らない。心理的距離や時間的距離が隔たっている場合にも用いる。また社会的立場や文化が異なる場合もある。

「おもいやる」の連用形が名詞化すると

「おもいやり」になる。こうしてみると、「おもいやり」と「想像力」とは密接不可分の関係にあることが考えられる。今更アランやサルトルを持ち出すまでもない。豊かな想像力に恵まれた人は、それだけ他人の心情や立場についての理解が行き届くことになる。想像力の貧乏な人は、他者への配慮を欠き、他者の苦痛や心配に対して鈍感になる。これは自己主張が強いとか、権利意識が強いということとは別の次元の問題であって、両者を混同してはならない。想像力とは、いわば教養の別名のようなものかもしれない。

今われわれは神戸大学に国際文化学部を開設すべく、日夜努力を重ねている。その基本的コンセプトは、自文化中心の物の考え方を超えること、多種多様な文化が共存共栄する世界の可能性を探ることにある。まさしく想像力の真価が問われる学部の創設ということになる。未だ開発途上の学問、未だ世評の定まらぬ学部、われわれはそんな未知の世界へ、己の想像力を頼りに踏み込もうとしているのである。縁あっていま神戸大学教養部に籍を置く皆さんの「おもいやり」とご協力を切に願う次第である。 (教養部評議員)

## 「日本の国際化と人権」

竜谷大学法学部長 <sup>キム</sup>金 <sup>ドン</sup>東 <sup>フン</sup>勲先生

神戸大学に入学されたことに心からお祝い申し上げます。大学生活4年間、皆さんそれぞれ違った希望、目標を持って入ってこられたでしょうし、それぞれの目標にそって勉強されると思います。その学生生活に、今日のわたしの話が少しでも役に立てばと思います。

皆さんもすでにご存じのように、ここ数年来「国際化」という言葉がひとつの流行語となっています。ただ、本当の国際化とはなにかということ十分に吟味して使われているかということ、疑問の点もあります。

さらにそのような国際化を迎える心構えを皆が持っているかということ、ほとんどの人がまだそうなのではないように思われます。もっとも大事なものは、心の国際化です。それは、自分とは違う人たち、異なる民族、文化を認め、それを尊重し、共に生きていくことです。それがなければ、国際化の時代を生きてはいけないのではないのでしょうか。従来文化は優劣関係においてみられがちでした。しかし、そうではなく、それぞれの文化が、それを担っている人たちにとっては、最高の文化であるのです。今後国際化が進むにあたって、日本よりは表面的には劣った文化をもつ人々と出会うかもしれない。しかしそのような人々が日本に来たときに、ひとりの人間として、ひとつの民族として認める心が日本人のなかになければ、本当の国際化時代は迎えられないと思われまます。

言いかえれば、一人一人の人間を大事にす

る、その権利を大事にする、その民俗性、文化を大事にするということです。その意味で、人権というのは国際化を生きていくうえで最大のよりどころであるのは、間違いないと思います。人権も、第二次大戦以前は、それぞれの国家が、憲法その他の法律や、国内努力によって保障する国内問題であって、国際法などが口を挟む問題ではないという考えが支配的でした。ところが、大戦後、この人権問題は、もはやそのような国内問題ではなく、国際社会が力をあわせて保障すべき国際関心事項であるという考え方が一般的となっています。国連においては、平和維持と並んで、人権と基本的自由の保障が目的とされているのです。国連においては、この一人一人の人権の保障という点における貢献のほうで、武力による平和維持よりも大きなものとなってきたという点を認識してほしいと思います。そして日本が国連、国際社会とどうかかわっていくかというときにも、やはり軍事面よりも人権と基本的自由の保障といった面で役割をはたすべきなのです。

ソ連のペレストロイカによって二極体制が崩壊し、脱イデオロギーの時代となるといわれています。ソ連や東欧でのこの大きな動きの原動力は、やはり人権であり、民族であると思います。全ヨーロッパ安全保障のなかでも、基本的な柱となっているのが、人権と民族自決権の保障であったのです。21世紀の国際社会の柱となるのが、この人権と民族自決

権であるとわたしは確信します。わたしは前から、21世紀は民族の時代であるとよく口にしてきました。つまり数が少ない、あるいは弱いという理由だけで抑圧され無視されて来た民族がようやく自己主張してきた。今後の新国際秩序ということが、よく権力者、政治指導者によって口にされますが、そのような秩序は、人権と民族自決権の保障なしでは確立できないとわたしは思います。

けれども、国連が採択した人権と基本的自由に関する条約のうちで、日本が受け入れたのはまだ6つほどでしかありません。経済や政治の面では超大国である日本は、むしろ人権に関しては後進国でしかない。たとえば人種差別撤廃条約が1965年に採決されて、この条約を受け入れている国が130近いのですが、そこに日本は入っていないのです。人権の面において日本が国際社会で指導的役割をはたさなくては、経済、政治の面でも、そのような役割をはたせないだろうと思います。

国際化と人権に関して日本がどうしても克服しなければならない問題はふたつあると思います。ひとつは、日本には日本人しかいないといういわゆる単一民族国家論、これは明治以来日本の近代化をすすめるうえで社会を支配してきたイデオロギーだったのですが、これを裏返してみると、日本人でない人たちの存在そのものを否定する、排他的な民族主義でしかない。たとえば北海道にはアイヌ民族がいる。あるいは戦後だけでも、日本国籍をとって日本人となっている韓国人朝鮮人が15万をこえている。そして中国人が6万ぐらい、あるいは韓国籍朝鮮籍の人が70万近くいる。にもかかわらず、いまだにそのようなイデオロギーは支配的なのです。国内の異民族、異文化の存在を無視しながら国際化というのはこっけいでさえある。たとえば日韓新時代といって、海のむこうの韓国となかよくしましうと言いながら、日本にいる韓国人の権

利を無視し、人間性を踏み付けにしているのです。このような単一民族国家観を捨て、たとえばアイヌ人の言葉を尊重し、朝鮮人韓国民衆教育を認めること。いわゆる「内なる国際化」がどうしても必要なのです。

もう一つの課題は明治以来この社会を支配している「脱亜入欧論」的な考え方からの脱皮です。日本におけるほとんどの人権問題は、アジアの人々の問題です。これは韓国人朝鮮人のみならず、いま社会問題となっている外国人労働者も、そのほとんどが、アジアから来た人たちなのです。また留学生のほとんどがアジア諸国からの人々です。このアジア人を迎える日本人の心はどうか。たとえばアパートを借りようとするとな断られる。アジアの指導国としてと、政治家はよく言います。しかしアジアの側からみると、日本はアジアに帰ってはいない。インターナショナルイゼーションというよりウェスタンイゼーションというような国際化に対する考え方が、多くの人たちを支配している。日本が本当に国際化の時代を迎えるのであれば、とくに近隣の、不幸な関係の歴史をもつアジアの国々、諸民族の信頼を回復し、正しい関係を構築していく必要があるのです。日本が世界に貢献するとしたら、まずアジアにおいて、軍事面ではなく、人権と民主主義の面において、指導的役割をはたすべきなのです。それは政府に任せておけるものではなく、この社会にいるわたしたち一人一人にかせられた課題です。

これから皆さんが学んでいくうえで、どのような分野であれ、企業や権力の論理ではなく、人間の論理、弱いものの論理、すなわち人権の論理によっていかねばならないと思うのです。ときには今日のわたしの話を思い出して、弱い人たちを無視する事無く、気を配りながら、学習生活をしていただきたいとお願ひして、わたしの話をおわりたと思います。

## 神戸大学での4年間

中井 達

1987年の4月に大阪府立大学から、ここ神戸大学へ移ってこの4月で丁度まる4年になりました。4年前に、教養部にお世話になるときにはこのように早く転出する事になるうとは思っていませんでした。このたび、たまたまお話があり、この4月より九州大学経済学部経済工学科に移る事になりました。4年前に神戸大学に移ってきたとき、これからは神戸の町をそれまで以上に色々と探検してみようと思っていたのですが、大学と自宅を往復する事が主となってしまい、それまでと余り変わる事がなく、せっかく神戸にいたのにその利点を生かしきれなくて心残りに思っています。しかし、わずかですけれどもそれまで知ることのなかった所を知る事が出来ました。大学入学以来、京都・大阪・神戸と3つの町と縁を持ち、今度は福岡という町と縁が出来る事になり、また新しい発見があるのではないかと期待しています。九州大学でこれから所属する経済工学科というところについて少し説明をさせていただきますと、この学科は私の知る範囲では日本でただ一つの学科ではないかと思えます。詳しい事は良くわかりませんが、出来てから10年くらいの学科で、どちらかといえば理科系の先生方が中心となっております。私は、その中で経済数学・数理計画法・オペレーションズリサーチといった科目を担当する講座に所属する事になり、今までに勉強してきた知識を生



かす事の出来る所ではないかと思っています。教養部在職中は、情報科学科の諸先生方をはじめ多くの先生方に大切に頂き、楽しく、また気持ち良く過ごさせて頂く事が出来ました。今となっては神戸大学にいた方が良かったのではないかと少し残念なような気分がします。神戸大学では情報科学科に所属していたおかげで、今まで知る事の少なかった事柄について色々教えて頂く事が出来、また、今までとは異なった見方をする事を覚え、この4年間いろいろ勉強させて頂きました。在職期間が4年間と、比較的短かったせいもあり、大学の事を含めて充分知るという事はありませんでしたが、また別の意味で色々な思い出も出来ました。この4年間に得られたものを大切にして、これからの九州大学での新しい生活に生かして行きたいと思っています。  
(情報科学担当)

## OUR YEAR IN KOBE

Melvin Zabarsky



Our year in Kobe, as the exchange professor from the University of New Hampshire, is coming, much too rapidly, to an end.

My wife, Joyce Reopel, my daughter Lydia and I have had a pleasant, happy, and productive time here in Kobe. We will miss all the very nice people we have come to know. I have taken a deep pleasure in the developing friendships with my colleagues in the English Department. I look forward to continuing these friendships for many years to come.

Lydia will remain in Kobe for another year, continuing her teaching at the Sumiyoshi Middle School. Her teaching experiences, my contact with the students of Kobe University, and Joyce's experience with an adult class, have given us as a family a unique opportunity to become familiar with a wide spectrum of people and their hopes and fears, their dreams and their realities. Without a doubt, we will miss all of these warm human beings when we've returned to New Hampshire.

These months have profited us in so many ways, including the many paintings both Joyce and I have produced, as professional artists living in Japan. Happily, we will be exhibiting our respective paintings in an art gallery in Kyoto. Joyce will exhibit her vistas of Kobe and its sky in twenty or so paintings done from our house high on Smiyoshi-dai. These works will be exhibited at the REW DEX gallery, opening on July 27th and continuing through to the last week in August. I shall exhibit my paintings at the REW DEX gallery in the Spring of 1992. My exhibition will include paintings made in my studio in Portsmouth, New

Hampshire as well as some paintings produced here in Kobe.

I'd like to offer some observation on my role here in the English Department of Kobe University. It seems to me that the students, by the time they start University, have already had an extensive exposure to English vocabulary and substantial reading experience. However the ability to use language as a tool to unlock meaning through comprehension, which is, of course, often heavily culturally-weighted, still needs developing. I believe that we, exchange professors who arrive at Kobe University after some years of being immersed in our respective disciplines: art, theater, political science, sociology, anthropology etc. offer valuable assistance to the students in the use of English as just such a tool. Our immersion in our disciplines has usually been an in-depth search for comprehensive understanding, and we then bring this attitude to our task here at Kobe, in our English classes. I can testify to the excitement generated each time a student and I come together in understanding something about our world. I am grateful to Kobe University and the University of New Hampshire in providing, through their faculty exchange program, me the opportunity to be a partner in this rich experience.  
(英語担当)

## 故中川保雄教授を偲んで

横山雅彦

この5月10日、自然科学史教室の同僚中川保雄さんが、半年にわたる[ ]との闘病生活も甲斐なく、亡くなられた。まだ40才台の若さであっただけに、また従来ほとんど未開拓の放射線災害史の分野での研究に精力的に取り組んでおられた時だっただけに、この逝去は大変惜しまれてならない。

中川さんが大阪府の科学教育センターから本教養部に着任してこられたのは、1978年の秋のことであった。着任の数日前のある晴れた夕刻、同センターの若い研修生を数名助手として伴いながら、多量の書籍その他の荷物を研究室に持ち運んでこられた時の雰囲気、私は今でもかなり鮮明に憶えている。それは、活気に満ち、仕事への情熱に溢れんばかりの青年中川さんの姿で、傍で見ていても小気味のよい清々しさを感じさせた。

その時から数ヶ月後、私達二人は、教授会その他の野暮用がない水曜日の午後には、いつも Th. Beck の名著 *Beiträge zur Geschichte des Maschinenbaues* を一緒に読み合うようになっていた。19世紀末に出版された Th. Beck のこの著作は、彼の兄弟 L. Beck の大作『鉄の歴史』ほど有名ではないものの、機械技術の本格的な通史として、今日でも十分読みごたえのある好著である。私達はいずれもそれまでドイツ語の技術用語に関する知識がほとんど皆無に近かったため、この読書会の進展は初めのうちはまさに牛歩の如く遅々たるものにすぎなかった。出だしの頃は、たしか一回で一頁も進まなかったこともあると



いう惨憺たる有様であった。それでも *Freude durch Leiden* という位の覚悟は持ち合わせていたので、この読書会もそれなりに結構楽しいものであった。そして最後にはこの著作のおよそ半分位までは進んだのではなかったかろうか。勿論、できうれば全体をきちんと読み通したかったが、その後私達はそれぞれに自分の仕事で多忙となり、数年間続いたこの読書会もいつしか、自然消滅の形で沙汰済みとなってしまった。

中川さんの告別式は故人の信念に相似しく無宗教で執り行なわれたが、激しい雨の降りしきるその式中、私の脳裡を去来したのは、この読書会でのいくつかの情景であった。出棺の間に、柩に菊を手向け、故人に最後の訣別を告げたが、既に現世の煩惱を超越したその死顔を凝視しながら、なぜかこの訣別が私自身にとってもひとつの時節の終止符であるような思いに襲われてならなかった。

有るほどの菊投げ入れよ棺の中(漱石)

西村秀夫(英語担当)



1974年(昭和49年)神戸大学文学部に入学(当時、市バスの料金は50円)、卒業後、すぐ近所にあった神戸市外国語大学の大学院、次に新設間もない神戸大学大学院文学研究科に進学、計9年間六甲近辺に出没した後、山口大学・鳴門教育大学にそれぞれ4年勤務し、この4月に再び神戸大学の一員になりました。

9年に及ぶ学生・院生生活の中で、教養部に在籍した1年半は自分にとって決定的に重要な意味を持っています。1974年の後期、水曜3限目の「人文科学総合」のテーマは「英詩」で、英語の先生方がリレー形式で、それぞれ専門とする詩について講義されました。1回目は三浦常司先生(現兵庫教育大)の担当で、「英詩の父」と称される、チョーサー(1340?-1400)『カンタベリー物語』が題材でした。ほんの一部分でしたが、当時の英語で読み上げられる原文の響き、一語一語についての丁寧な解釈・説明は、もともとことばに興味を持っていた自分に強い印象を与え、専門課程に進んでイギリス中世期の言語・文学を専攻するきっかけとなりました。

現在、「バンキョー」という、はなはだ耳障りなことばが蔓延しているようですが、教養だって決して捨てたものじゃない、きっとどこかで何かが見つかるはずだということを自分の経験から言っておきたいと思います。

教養部の外観は自分が学生だった頃とほとんど変わっていません。しかし、当然のことながらその中身はこの十数年のうちで大きく変化しています。何がどう変わったのか、そしてこれからどのように変わるのかをしっかりと見据えて行くことが、

「二度目の入学」をした自分に課せられた重要なテーマだと考えています。よろしくお願ひします。

山澤孝至(英語担当)



京都大学大学院博士課程修了。専門は西洋古典文学。京都大学(助手)より転

名前では随分苦労しています。まず、振仮名を打たなければタカユキと正しく読んで貰えぬこと(これは姓名判断などに頼った揚句ヒネクレタ訓み採った親が悪い。次に、戸籍が「澤」の字になっているため、おカミに出す書類には、税金の確定申告を除いて、日頃愛用の簡素な「沢」ではなく面倒な旧字を使わねばならぬこと(これは、戸籍などという下らぬものを後生大事にしている日本の社会が悪い)。最後に、ヤマザワなのかヤマザワなのか判然としないこと(これは誰が悪いのでしょうか?)。便宜上自分では専ら濁音を用いていますが、ヤマサハビトは『万葉集』にも見える由緒ある名辞ですから、清音で呼んで下さっても構いません。

78年にこちらの文学部を卒業しておりますので、13年ぶりの生還、教養部には、何分仮進学のあと英語2単位とドイツ語2単位と体育理論を履修に3年迄通っておりますので、15年ぶりの復縁となります。(計算が合わないとすれば、それは結局卒業に5年かかったためです。大学当局の温情に報いることができなかったわけですが、どうもあの「仮進」は何かの間違ひではなかったかと未だ腑に落ちぬものがあります。)

教える側にまわるというのは余り気持ちのよいことではありませんが、殊に英語となると、専門の訓練を受けていない自分にどれだけのことができるか、心許ない限りです。もともと、テキも

こちらの実力を即座に見抜いて早々に見限ってくれているのか、出席者数の着実な増等まことに紳士的であり、お陰で事無きを得ています。とはいえ、「英語（英文学）が専門ではないので」という逃口上をいかに減らすかを今後の目標と致しますので、皆様宜しくお付き合い下さい。

#### 河本敏郎（物理学担当）

この4月から物理学担当として教養部にお世話になっています。

専門は物理の中の量子エレクトロニクスという、名前だけ聞いても何を意味するのかわからない分野です。広い意味では原子核・素粒子物理学に対して物性物理学に属しますが、実は物性は殆ど対象としません。物にこだわらず現象を追求する学問です。レーザーや電波を用いて、物質と電磁波との相互作用そのものに注目し、新しい現象や新しい分光法を開拓しようというものです。流行にとらわれず、人のしていないことを目指すのですが、悪く言えば、世の中の情勢を無視して我が道を行くといったところでしょうか。

坂と階段の多い学内や地上2階にある4階の部屋にも親しみがわいてきたこのごろですが、神戸大学でまた初心に戻って教育・研究に頑張りたいと思います。よろしくお願い致します。

#### 廣田正敏（仏語担当）

神戸は私の故郷です。私の原風景といえるものがこの街にあります。それだけに、神戸大学で仕事ができる機会を得ましたことは、



大きなよろこびです。よろこびという以上に、なにか運命的な巡り合わせを感じます。

それといいますのも、私はこれまでいくつかの土地に住み、いくつかの大学に勤め、そして人との触れあいを大切にしながらも、心は郷里を一刻も離れなかったからです。海も、空も、そして空気そのものさえもが、ここでは、私を快く迎えてくれているという気がします。このような親しみのある風土でこれからの歳月を過ごせることを幸せに感じ、がんばりたいと思います。

私の専攻はフランス文学。19世紀末から20世紀前半にかけての小説、詩についての研究をしてきました。よく知られたアンドレ・ジッドに心ひかれ、その感性和知的なレトリックに興味をそそられたのが私の文学研究の出発点でした。そのあと、「チボー家の人々」で有名なロジェ・マルタン・デュ・ガールの研究にとりかかり、ジッドの作風といかに違うかに驚きとまどいながらも、新しくひとりの作家を知る楽しさを十分に味わいました。

ここ十年ほど19世紀末象徴派の詩人ジュール・ラフォルクの翻訳や研究に時間を費やしてきました。決して、大詩人とはいえないこのマイナー詩人の絶唱に、時として深く心を打たれ、日本でひとりでも多く愛読者が増してくれることを願っています。最近、若い日のジッドが一時期、ラフォルクから影響を受け、それもきわめて重要な影響であると認識するに及んで、このことを小さな論文にまとめたいと思っています。

「影響は一種の暴力である」とジッドはいいました。受ける側の個性、反抗と受容などで、一般に「影響」がもつ意味がどう変わるか、これが今後の私の研究課題になっていくと思います。どうかよろしくお願い致します。

#### 鶴飼信光（英語担当）

私の出身地は愛知県の稲沢市というところ。日本一の植木の産地を自称するような田園地帯でした。大昔はまだ分流されていない木曾三川があたりを流れていたもので、私の先祖はひょっとすると本当に「鶴飼い」をしていたのかもしれない。

田舎育ちのせい、都会でも住んでいる土地にはすぐに愛着を感じるようになります。先日も近くの図書館で、『神戸100年』という写真集を見ましたが、一口に「神戸」と言ってもさまざまな時期の神戸があるものだと痛感しました。もっとも、都市の様子に変化してきているのは神戸にかぎったことではありませんが、今は樹々におおわれている六甲山も明治38年に植林が行なわれるまでは完全なげ山だったという写真もありました。その六甲山のふもとの神戸大学では、教養部改組の嵐が吹き荒れているのですが、これもまた、諸行無常の響きありと言ったところでしょうか。

大学では学生が一週間に英語に割くことのできる勉強量の限界を越えるか越えないかくらいの課題を出して、教室で補助的な説明を加えるという授業をしています。当然のことながら学生にはこの上なく不評を買っているようです。たとえ悪役プロレスラーのように憎まれようとも、学生が半年間一生懸命に勉強すればもって瞑すべしと思っ



案しているところ。それにしても、授業や会議は非常に疲れるものです。しかし、それで休日にぐったりとしていては、自分自身が無知蒙昧の沼から抜け出すことができません。先生がたには、今後とも御指導御鞭撻をお願い致します。

#### 定延利之（日本語・日本事情担当）

日本語・日本事情の定延利之（さだのぶ・としゆき）と申します。京都大学大学院で言語学を勉強しておりますが、田窪先生の後任として4月に赴任致しました。よろしく申し上げます。

実は高校の一時期、神戸大学の学生の方に勉強を見て頂き、丁寧なご指導に感激したことがあります。ご縁があって、その神戸大学に赴任してみますと、先生方や職員の皆様方から大変ご親切にして頂き、素晴らしい大学との印象を一層強くさせて頂きました。利益還元の見地からも、後期は留学生だけでなく、特講で日本人学生を教えたいと思っております。

童顔のため、ネクタイをしないと仲々社会人と思っ

て貰えないので悔しい思いをしております。4月、六甲道から乗ったタクシーで運転手が開口一番「ニーチャン、今年の入試はむつかしかったやろ」。「いえ、あの、ボク、小論文と面接だけでしたから」と思わず答えた私は関西出身です。

趣味はジャズ（元、ジャズ喫茶の雇われマスター）。能楽（元、素人面能打ち）。プロレス（元、……）B型さそり座のあっさりした性格です。

地が出てきたようなので、このへんで終わらせて頂きます。



イザベル・シャリエ (Isabelle Charrier) (フランス語会話担当)

Née dans une famille de viticulteur dans la région de Charente maritime située au Nord de Bordeaux, je suis une provinciale montée à Paris pour suivre des études de lettres classiques à l'Université de la Sorbonne et d'histoire de l'art à l'Ecole du Louvre. Tout en travaillant comme bibliothécaire à la Bibliothèque Publique d'Information du Centre G. Pompidou, je me suis spécialisée sur l'histoire de la peinture contemporaine. M'intéressant à l'art extreme-oriental, j'ai écrit un mémoire de maitrise sur l'œuvre du peintre Sato Key (1906-1978) qui a vécu pendant 25 ans à Paris. Au cours de nombreux entretiens que j'ai eus avec lui, il m'a initiée à l'esthétique de son pays et m'a fait prendre conscience de l'importance de la tradition dans sa création meme si elle était engagée dans le courant de l'art international.



En 1979 après avoir obtenu une bourse du gouvernement japonais, je suis donc venue à l'Université de Kyoto pour poursuivre mes investigations, tout ceci nécessitant d'apprendre le japonais. Il y a deux ans j'ai présenté ma thèse de doctorat nouveau régime l'Université Paris-Sorbonne, qui sera publiée dans une version abrégée au mois de novembre 91.

Je suis très honorée d'avoir été acceptée comme lecteur de francais à l'université de Kobé.

—教養部のうごき—

人 事 異 動

平成3年

4. 1	情報科学 助教授	中 井 達	九州大学へ転出
	西洋古典語・助教授	田 窪 行 則	九州大学へ転出
	図 学・助教授	小 高 直 樹	昇任
	情報科学 講師	大 月 一 弘	昇任
	英 語 講師	西 村 秀 夫	鳴門教育大学より転任
	英 語 講師	山 澤 孝 至	京都大学より転任
	物 理 講師	河 本 敏 郎	京都大学より転任
	仏 語 教授	廣 田 正 敏	採用
	英 語 講師	鵜 飼 信 光	採用
	西洋古典語・講師	定 延 利 之	採用
	仏語・外国人教師	シャリエ・イザベル・ ジャンヌ・マリ	採用
4. 16	化 学 講師	大 塚 利 行	昇任
5. 10	自然科学史・教授	中 川 保 雄	逝去
8. 1	歴 史 学 教授	須 崎 慎 一	昇任
	心 理 学 教授	杉 野 欽 吾	昇任
8. 31	英語・外国人教師	ザバラスキー・メルヴィン・ ジョエル	契約期間満了
9. 1	英語・外国人教師	ゴードン・バーナード・ケイ	採用

人 事 異 動

4. 1	事務長補佐	根 木 惣次郎	教育学部事務長補佐へ
	経理掛長	西 垣 定 友	文学部会計掛長へ
	教務掛長	今 津 清	工学部教務学生掛長へ
	第二課程掛長	須 原 潔	医療技術短期大学部教務学生掛長へ
	附属図書館教養部分館 保管運用掛長	小 川 仁 美	附属図書館情報サービス課 情報サービス第二掛長へ
	庶務掛	吉 田 清 孝	明石工業高等専門学校 庶務課庶務係庶務主任へ
	教務掛	井 上 隆 昭	附属農場総務掛庶務主任へ
	学生掛	宮 脇 秀 樹	工学部教務学生掛へ
	事務長補佐	吉 川 圭 三	経済学部事務長補佐から
	経理掛長	古 川 卓 見	附属病院医事課栄養掛長から
	教務掛長	岡 田 清	法学部教務学生掛長から
	第二課程掛長	原 實	工学部教務学生主任から
	附属図書館教養部分館 保管運用掛長	森 友 洋 子	附属図書館情報サービス課 自然系情報サービス掛長から
	庶務掛	佐々木 基 充	経済経営研究所附属 経営分析文献センターから
	教務掛	水 堅 哲 夫	附属病院医事課外来掛から
	経理掛・事務補佐員	杉 山 早 苗	採用
	教務掛・事務補佐員	池 上 葉 子	採用
	生物学教室・技術補佐員	渡 邊 貴久子	採用
	体育教室・事務補佐員	山 内 祐 子	採用
	附属図書館教養部分館 保管運用掛・事務補佐員	天 野 典 子	採用
	附属図書館教養部分館 保管運用掛・事務補佐員	平 井 敏 子	採用
4. 11	文科共同研究室事務補佐員	岸 本 み か	採用
6. 30	文科共同研究室事務補佐員	佐 伯 幸 子	辞職
7. 1	自動車運転手	西 田 行 隆	経理部用度掛へ
	自動車運転手	石 地 照 仁	経理部用度掛から
	文科共同研究室事務補佐員	佐 尾 美 保	採用

—新任事務官紹介—

吉川圭三 (事務長補佐)  
この度、約15年振りで教養部に帰って来ました。以前と同様によりしくお願いします。  
古川卓見 (経理掛)  
4月1日付けで附属病院からまいりました。微

いたします。  
岡田 清 (教務掛)  
4月1日付けで法学部より配置換になりました。学生数の多さに驚いていますが、体を鍛えて頑張りますのでよりお願いいたします。  
原 實 (第二課程掛)  
根は暗いのですが「表面は明るく楽しく」が motto です。すべてに中途半端な趣味は、フォーク

ソング、トレーニング、オートキャンプ、林道ドライブ、山菜取り、その昔はバックパッキングetc.今はやりのファジーな性格を生まれた時からやっています。欠点はタバコがやめられない意志の弱さです。

森友 洋子 (保管運用掛)

教養部図書館へ移って来て早や三ヶ月がこようとしています。事務室の人達と違って我々図書館員は異動馴れしていないので図書館歴？十年の私もやはり初めは緊張いたしました。特に騒音に弱い私はすぐ前を走る車の音、応援団の発声練習、ブラバンの演奏、テニス部のかけ声に一日中囲まれ新入生歓迎時期に至っては呼びこみや生演奏で耳をつんざくばかりの騒音の真ただ中であって、此処が図書館？利用者はどうしているんだろうと呆然とするばかりでした。しかし馴れとは恐ろしいもので今ではその騒音をBMがわりにして仕事をしている自分自身に驚いている次第です。思えば研究者中心の医学図書館から自然系図書館を経て学生中心の教養部図書館へといろいろな図書館を経験してきたものです。行く先々でそれ以前にはやったことのない仕事を担当して相当知っていたつもりの方も新たに勉強しなければならない事の如何に多いかを実感する毎日でした。今又、教養部改革、図書館改革構想が盛んに云われています。図書館は古いものをひきずりながら、一方で今後ますます機械化は進むでしょう。その中でたえず“利用者にとって良い図書館とは？”と考え続けていきたいと思っています。

佐々木 基光 (庶務掛)

経済経営研究所から参りました。庶務掛の仕事は初めてですが、一所懸命頑張りますのでどうぞよろしくお願いいたします。

水堅 哲夫 (教務掛)

この4月に病院からまいりました。教務の仕事は初めてですが、かんばりますのでどうぞよろしくお願い致します。

杉山 早苗 (経理掛)

4月から経理掛でお世話になっています。学生ウォッチングをしながら、若づくりをし、結局は年の差を感じる自分にあきれてしまう、彼氏のいないさびしい孤独な私です。御迷惑をおか

けすることと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

池上 葉子 (教務掛)

教務掛のカウンターの向こう側で寂しそうに座っているのが私です。皆様のあたたかい一言、お待ちしております。

山内 祐子 (保健体育科)

初めての仕事ということで、とまどうことも多く、皆様には、多数のご迷惑をおかけしておりますが、暖かく接して下さる方ばかりで、とても恵まれた環境の中にいるのだと思います。おかげ様で楽しい毎日です。

これからいろいろとご迷惑をおかけ致しますが宜しくお願いします。

天野 典子 (保管運用掛)

図書館保管運用掛に、4月から御世話になって居ります天野です。毎日の徒歩通勤で体力をつけて頑張りたいと思っています。

よろしく御願ひします。

岸本 みか (文科共同研究室)

四月から文科共同研究室でお世話になっております。まだまだ不馴れですが、どうぞよろしくお願い致します。

佐尾 美保 (文化共同研究室)

明石の保育所から参りました。慣れない職場ということで、御迷惑をおかけすることも多いと思いますが、よろしく御願ひします。



前列右から 岸本、佐尾、渡邊、山内、杉山、池上、後列右から 原、吉川、岡田、古川、水堅、佐々木、石地の各氏

一図書館だより一

ニュートンから  
「銀河英雄伝説まで」

平成2年度(平成2年4月1日~同3年3月31日)に購入(し受入登録)された図書は、和書・洋書合わせて、10,255冊です。(雑誌のバックナンバーの製本と寄贈されたものを含みます。)図書の内容を分野別に区分すると、別表の1のようになります。やはり、教養部としての性格上、社会科学(政治、法律、経済など)、自然科学(数学、物理、化学など)、文学(日本、英米、ドイツ、フランス文学など)の冊数が多くなっています。図書館では、利用者の方がさまざまな書物の中から、求めるものを容易に検索できるよう、予

め大系だった分類表をもとに、個々の図書に分類記号を与えて主題別にグルーピングしています。分類表の正式名称は日本十進分類法(Nippon Deciml Classification)、私達の間ではエヌ・ディー・シーと呼んでいます。

別表1のように、NDCは学問分野を9区分し、区分出来ないものに対しては、0(ゼロ)類を与えて、最終的に10区分とする構成をとっています。書物の主題を10区分に分けているために理解しやすいですが、逆に、新しく出現した主題を表現することは難しく、これまでに過去8回改訂されています。現在、教養部分館で図書の整理のために採用しているのも、この新訂8版(1978年改訂)です。

因に、8版で新しい主題として独立の項目が与えられたのは、情報科学(ソフトウェアも含む)、比較宗教、環境・公害、情報工学、

別表(1)  
平成2年度

分野別受入冊数

区 分	和 書	洋 書	合 計	構成比	NDCの範囲
0 総 記 General works	751 冊	129 冊	880 冊	8.6 %	000~ 099
1 哲 学 Philosophy	487	265	752	7.4	100~ 199
2 歴 史 History	570	104	674	6.6	200~ 299
3 社会科学 Social sciences	1,436	428	1,864	18.2	300~ 399
4 自然科学 Natural sciences	871	1,264	2,135	20.9	400~ 499
5 工学・技術 Technology	281	64	345	3.4	500~ 599
6 産 業 Industry	92	5	97	0.9	600~ 699
7 芸 術 The arts	477	116	593	5.8	700~ 799
8 語 学 Language	562	169	731	7.1	800~ 899
9 文 学 Literature	1,402	752	2,154	21.1	900~ 999
合 計	6,929	3,296	10,225	100	

海洋開発等があります。学問の進歩と時代の流れが、分類大系にも影響を及ぼしていることが、お判りいただけるでしょう。

さて、最近図書館で購入した本の中に、「講座科学史 全4巻」(伊東俊太郎・村上陽一郎共編)があります。分類記号は、叢書名から当然、NDCの「402」(科学史)を与え、ラベルで図書に表示し、書架に並べてあります。学問分野、知識大系を分類することと、現実の学問の進展という、一見相反する関係を考える上で、先程の編者の一人は以下のような面白いことを言っています。

科学史は若い学問である。「科学」とか「サイエンス」の単語には、19世紀初めまで今のような「自然科学」の意味はなかった。

従って、ニュートンがやっていたのは、「哲学」ではあっても「科学」ではなかった。

また、科学史はここ30年の間に大きな変革を経験しており、そこにはニュートンのような英雄は登場しない。科学は「科学」としての特権を失い、他の知的領域との境界が曖昧になっているだけでなく、他の文化圏とも関係をもっている。単なる科学理論の集合ではなく、多くの領域に開かれた在り方になっている……と。

昨年度数多く貸し出された図書は、別表2のとおりです。ご参考までに。

最後に図書館からのお願ひですが、館内で読み終えた本は、必ず元の場所へ戻して下さい。また、館外貸出しをした本はカウンターに返却して下さい。そのほか、「飲食禁止」などのマナーを守って、大いに図書館を利用して下さい。

別表(2) 図書貸出頻度別リスト  
平成2年度

頻度	著(編)者名	書名	発行所	NDCの分類記号
29回	モードル, W.	薬の話	タイムライフブックス	化学(*)
22	田中芳樹	銀河英雄伝説 外伝	徳間書店	923.6
20	手塚治虫	アドルフに告ぐ	文藝春秋	726.1
19	吉本ばなな	Tugumi (つぐみ)	中央公論社	913.6
19	村上龍	トパーズ	角川書店	913.6
19	田中芳樹	タイタニア1疾風編	徳間書店	913.6
18	村上春樹	ダンス・ダンス・ダンス	講談社	913.6
18		うわさの本(別冊宝島92)	JICC出版局	051
17	田中芳樹	銀河英雄伝説	徳間書店	913.6
17		おたくの本(別冊宝島104)	JICC出版局	051
17	イトウセイコウ	ノーライフキング	新潮社	913.6
17	シェルデン, S.	ゲームの達人	アカデミー出版	933
16	中谷巖	入門マクロ経済学 第2版	日本評論社	331
16	浦昭二	FORTRAN77 入門	培風館	情報科学(*)
15	石ノ森 章太郎	マンガ日本経済入門	日本経済新聞社	331
15	ファインマン, R.P.	ファインマン物理学 I 力学	岩波書店	物理(*)

[備考] 分類記号で「化学」「物理」のようにあるのは、推薦図書の「推薦学科目名」です。

## —特集—大学改革を考える

### 1) 「大綱化」とは何か

瀧上 凱 令 (心理学)

#### 1. はじめに

本年2月8日の大学審議会答申をうけて、「大学設置基準」が改正され、すでに7月1日から施行されている。また、大学院設置基準、学位規則、短期大学設置基準など相互に関連した文部省令もそれぞれ改正され、同様にすでに施行されている。これより今後大学教育のあり方が大きな影響を受けるであろう。しかしながら、学生諸君の中でこれがどういふことなのかを知っている人はほとんどいないであろう。そこで、何が、どのように、変わるのかを簡単に紹介することにする。

#### 2. 大学設置基準とは何か

大学設置基準とは何かは、この省令の第1条の第2項に「大学を設置するのに必要な最低基準とする」と明記されている。また、大学を設置するための何についての基準かは、設置基準の全体構成をみるとわかる。改正後の大学設置基準は、第一章 総則、第二章 教育研究上の基本組織、第三章 教員組織、第四章 教員の資格、第五章 収容定員、第六章 教育課程、第七章 卒業の要件等、第八章 校地、校舎等の施設及び設備、第九章 事務組織等、第十章 雑則の10章からなっている。つまり、大学を作るには、学生数に応じて、土地が何平方メートル以上、校舎が何平方メートル以上、図書が何冊以上、教員が何人以上なければならぬといったことが、具体的な数字を含めて、細かく規定されている。また、教員にはどのような資格が必要か、どんな科目をおく必要があるか、単位はどの

ように計算するのか、卒業に必要な単位は何単位かといったことも細かく規定されている。

#### 3. 何がどのように変わったのか

今回の改正はこの省令の全体にわたるかなり大幅なものであるが、特に重要なのは授業科目の区分と卒業要件についての改正の部分であろう。これまでの設置基準では、大学で開設すべき授業科目は「一般教育科目」「外国語科目」「保健体育科目」「専門教育科目」とされ、それに従い、卒業要件も次のように規定されていた。

「大学に4年以上在学し、次の各号に定める単位を含め、124単位以上を修得することとする。

1. 一般教育科目については、人文、社会及び自然の3分野にわたり36単位
2. 外国語科目については一の外国語の科目8単位
3. 保健体育科目については、講義及び実技4単位
4. 専門教育科目については、76単位」  
(医学部等は6年以上で、単位数の規定も当然異なっている。)

しかし、今回の改正で、この科目区分が一切なくなり、それに従って卒業要件も「大学に4年以上在学し、124単位以上を修得すること」となった。細かい数量的な規定を少なくし、大枠を示すにとどめるいわゆる「大綱化」といわれる方向への改正である。

#### 4. どのような影響があるのか

これにより、従来のように一般教育科目や外国語、保健体育を必ず置く必要はなくなり、各大学、各学部がそれぞれの教育目的に応じて自由にカリキュラムを組むことができるようになった。各大学はどのような人材を社会に送り出すのかをもう一度原点に帰って考え

直し、それに応じてどのような教育を行うべきかを再検討する必要に迫られているわけである。また、一般教育科目等の授業をもっぱらやる「教養部」という組織も必ずしも必要ではなくなったわけで、これについても再検討が必要となった。

一般教育は、戦前の高等教育における専門分野に偏った狭い教育に対する反省の上にとりいれられたもので、いわば新制大学教育の目玉ともいえるものであった。しかし、制度的には、旧制高校等と専門学校、旧制大学等をそれぞれ年限を短縮してつないだだけといった中途半端なものになり、一般教育の理念は十分には生かされなかった。そのため、新制大学教育の問題点として絶えず問題にされ続けてきた。したがって、今回の改革は新制大学発足以来の大改革ということになる。

これにより、一般教育がなくなり、大学教

育が専門学校化するのではないかという危惧が大学関係者の中にもある。しかし、一般教育がいらなくなったわけではない。現在の大学の現状を考えると、一般教育という名前はなくなるかもしれないが、一般教育の重要性はむしろ増しているともいえる。教養部では一般教育の在り方について以前から検討を続けてきた。また、全学的にも「一般教育等カリキュラム調整委員会」「教養部改革に関する協議会」などの委員会が設置され、「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配置しなければならない。」(第19条第2項)という、新しい設置基準の規定に従ったカリキュラムとそれを実施するのに相応しい組織の検討が開始されている。

## 2) 座談会「21世紀の大学をめざして」

出席者(発言順)：宗像 恵(哲学) 角田 譲(数学) 三木原浩(仏語)

姥名邦禎(物理) 合田 涛(文化人類学) 大野隆造(図学)

小川暁夫(独語) 津田義夫(英語) 天野郡壽(体育)

編集委員(司会)：橋本(西洋古典語) 國友(物理) 河辺(体育)

宮田(独語)

司会 教養部の改革も10年以上前から計画されてきたのですが、いよいよそれも大詰にさしかかってきています。特に7月1日からいわゆる設置基準の「大綱化」が実施されました。これはおそらくこれから21世紀へ向けて大学が変わっていくひとつの大きな節目になるものだと思います。この大綱化のひとつのモデルケースとして神戸大学の改革はあるわけで、これからの教養部の行方、大きくい

ば大学の、文化の行方について、今日は率直なご意見を話していただければと思います。たとえば、改革が教養主義の崩壊と関連して論じられることも多いのですが、それについて宗像さんはどうお考えですか。

<大学における一般教養>

宗像 コストという面から言うと、大学教育でいわゆる一般教養を本当に身につかせよ

うとすると、一人当たり非常にお金がかかるはずですね。けれども、そんなところにあまりコストをかけたくない、これが問題なのではないでしょうか。個人的な経験を申しますと、大学紛争中ということもありましたが、ぼくなどは大学に入って教養部の授業に失望したものの一人で、高校時代に当時の最新の知識を伝えようとした熱心な先生方の授業のほうはずっと内容が充実している、と思ったわけです。いま、ぼくの授業で少なくともそのような不満は出ないようにとところがけているのですが、そうすると今度は脱落する学生も出てくる。ですから、内容の充実した授業をしようと思ったら、どうしても少人数で、きめ細かくしていく必要がある。そうすると非常にコストがかかる。けれども実際はマスプロ教育しかされなかったわけですから、いま批判がでてきているのも当然だと思います。角田 教養部のいちばんの問題は、学生数と教官数のアンバランスですよ。教官が少なすぎて、学生が教官にじかに触れ合う機会があまりない、これはよくないと思います。たとえば、数学を専攻する学生が数学しか勉強しないというのは、狭い人間を作ることになってしまうし、非常に具合が悪いわけですね。ところが、それでは哲学などを勉強しようと思っても、大教室で一方向的に授業を受けるだけで、教官からじかに学ぶ機会はほとんどないでしょう。やはり問題は、予算が少なすぎることで、それがいわゆる教養主義の崩壊を招いたといえるのではないのでしょうか。三木原 ぼくの経験からいいますと、教養部時代は、かなり有意義なものでした。授業という枠組を外して、教養部で過ごしたあの二年間を全体としてふりかえると、そういえるような気がするんです。個人的なことで恐縮ですが、大学に入学するまで、新聞の第一面など読んだこともない、ただただ寝ころが



て、クラシック音楽を聴き、世界文学全集を読むのが好き、という世間知らずだったんですが、どこか、ばくぜんと、「人間」と「世界」について勉強してみたい、それには、よくわからないが、文学部がよさそうだから、ぐらゐの気持ちで入学したわけです。ですから、ちょっと気恥ずかしいんですけど、本当に人生と向きあって悩みはじめたのはそれ以後で、教養部の二年間の精神の揺れは、ダイナミックでした。そんな精神の揺れを許容してくれた教養部に、個人的にはとても感謝しています。ついで、一般教養の授業からもそれなりに刺激をうけ、たとえば政治学とか、自然人類学とか……世界文学全集以外の本も、ずいぶんいろいろと読み漁るようになりました。といっても年間通して五回以上出席した講義なんてひとつもないんですけど、語学を除いてはね。刺激は、一回きりの授業で十分の場合もありますし、それに大学全体がどこか「勉強は自分でしたら」という雰囲気でしたし……かなりおおらかでロマンチックな教養部だったんです。ただ語学の授業だけはよく出ましたね。ひとつには、語学はトレーニングですから、一人で悩んで考えこんでいるより、授業に出たほうが能率がいい、ということもあったんですが、いまひとつには、こちらのほうが大切な理由なんですけど、語学はクラス別になっていたもので、友人を作りやすかった、それも専攻に別れていく以前の未分化の状態の友人をたくさん作る機会を見付け

やすかった、ということだったんですね。

### <一般教育と専門教育>

**司会** これまでは、専門に分かれる前に、みんなが教養部というひとつの場を共有していたわけですが、これからは、最初の段階から専門課程へ入って行って、そのような共通の場が無くなってしまいうわけですね。一年のときから、専門教育とこれまでの一般教養を平行して受けることになるのですが、これについては文科系と理科系で受け止め方も違うのではないのでしょうか。

**蛭名** ぼく自身の経験では教養部時代は文系の授業にはほとんど出なくて、むしろ専門に進んでから文学部の掲示板をみておもしろそうな講義を聞きに行くということをやっていました。理系の学生が教養部に入ってきたとき、政治学とか、経済学に対する問題意識は非常に希薄ですね。それらは、大学院に進んだり、現実社会にもっと触れるようになってからでくるもので、ぼく自身も、もぐりよく聴講させてもらいました。そういう意味では、最初の二年間で一般教養を教える必要性はあまりなくて、四年間に分散するのは意味のあることだと思います。

理科系の教育システムの問題についていえば、先程から大人数の授業の弊害が指摘されていますが、ぼくも教養部の頃は理系のそのような授業にはあまり熱心には出ませんでした。けれどひとつだけ例外があって、それは物理の実験の授業だったのですが、数人で半年かけてひとつの実験をやるんです。まず、文献を読んで、数週間かけて実験装置をガラス細工から作って、実験をしてデータをまとめて発表する。これは教官の側からみるとなかなかたいへんなのですが、ぼくにとっては非常に有意義なものでした。

**合田** 一般教育と教養部は別の問題ですね。

一般教養そのものは必要ですが、それを教養部のみが担当するということになる、問題がでてくる。つまり担当する先生方は、はるかに大きいキャンパシティをもっているのに、基礎的なことばかり教えなければならない。その中で錆びついていかにいかに、現在は皆さん内部努力でなさっているわけですが、これを制度的にも変えて行く必要があるのではないか。その意味では、大綱化によって各大学の自由に任されるところが広がるというのは、いい機会ではないかと思えます。

**宗像** どんな学科にも概論というものがある、いまは一般教育として教養部がそれを担当するということになっていますが、これからは、各学部の各学科がその学科の専門家養成のためというのではなくて、全学部に関わった概論講義をもつ必要があると思えます。専門へ行く準備としての一般教育というこれまでの先入見を捨てて、学年に関係なく興味をもった人間が受講でき、単位を与えられるような制度を保証することが、これからの一般教育を考えるうえで非常に重要なのではないのでしょうか。

**大野** 特に理科系の先生では、専門研究を何十年もやってこられて、自分のやってきた学問がどんなことだったのか、それは歴史の中でどのように位置付けられるのかということに興味をもたれることが多いですね。そのような先生に、広い視点から概論をやっていたらいいと思えます。

それから一般教育の問題は、いわゆる大学の大衆化という視点から論じられる必要があるのではないのでしょうか。旧制高校的な、放し飼いにして自分の興味、関心を広げ、深めるというやり方は、やはり少数精鋭的なものであって、現在の大学でそれをそのまま生かそうとすると、大多数の部分が抜け落ちてしまう。その大多数と、少数のどちらに目を向

けているのかを、議論の際に常に意識しておく必要があると思えます。

### <大学における語学教育>

**小川** 外国語に関しては、特に未修外国語が問題になると思えますが、まず概論ができないんですね。ぼく自身の経験ですが、一回生



の時に「ドイツ文化入門」というような概論が必修であって、それは非常に退屈でした。それはやはり、こちらにドイツに関する問題意識や知識が少なすぎたということがあると思うんです。ところが二年ほどドイツ語を勉強して、教養の世界史の講義を受けたら、ドイツを専門にされている先生だったんですが、非常にフィット感があって、おもしろかったです。

**司会** たとえば理学部の物理学科や数学科の学生たちがドイツ語を勉強するいうときに、明確な目的意識もないし、義務的にやらされるという面が大部分ですよ。そこでやはり、専門の先生が自分の専門領域に関連するものをドイツ語で読むという授業をしてもらえれば、第二語学に対する興味や関心も高まると思うんですけどね。

**角田** ぼくは教養でフランス語をとったんですが、少しでも読めるようになったのは、学部へ行って、ブルバキを読むようになってからです。やはり自分の興味のあるものを読むというのが、語学ののびる最善の方法だと思います。だからといって、ぼくが一年の時に、

基礎的なことをひとつもなっていないとしたら、ブルバキは読めなかったらと思う。だから、二年間びっちりフランス語をやる必要はないにしても、基礎的なことはどうしても教えてもらわなければいけないんですね。

数学も、第二外国語と同じようなところがあって、数学の文法といえるような基礎的なことを始めから教える必要があるのと同時に、概論をするのが非常に難しい。そこで制度的な枠が外れたときに、その基礎的なものをどういう形で教えていくのかは、非常に問題になってくると思えますね。

**津田** いま英語に関しては、8単位から6単位とらないと卒業できないというようになってますね。スタッフの負担は週6コマないし5コマで、一クラス60人を超すクラスもある。教育のための条件としては、学生定員の増加などからして非常に悪くなってきています。さらに、受験勉強の影響でしょうが、教室外で学生があまり勉強しない。そうしたいろいろな状況を考えると、全学生に8コマ、6コマを必修として課すことが問題だろうという気がします。そこで思い切って、必要単位は4ぐらいに減らして、あとは増加単位にすればいいのではないかと。その代わり、興味と必要のある学生は、あといくつでも、何年生でも、取れるようにするようにすればどうかという案を出しているところです。一年の時に講読という形で4単位、あとパラグラフが全体として何を言っているのかを捉えるというパラグラフ・リーディング受検勉強の影響で今の学生はこれがほとんどできません。これでもう一年間かかるのではないかと考えています。それ以外の語学の訓練に関しては、選択制にして、人数も制限した形でやったほうがいいのではないかと意見です。それを出した



ところ、学部の方から反対を受けている状態です。

角田 どのような点で反対されているのでしょうか。

津田 今の学生は勉強しないから、8単位と言う形で強制しないと勉強しないという学生不信がいちばん強いようですね。

司会 その8単位で、何を教えてくれと学部の先生方は要求してるんですか。

津田 それははっきりしないんです。

司会 それをはっきりさせないで、ただこれまで通りやれというのは、納得できません。さっきも言ったように、僕は学部でも専門にそった語学、例えば英語なら英語、ドイツ語ならドイツ語を教えるべきだと思うんです。それをしないで、教養の語学にすべてを任せるのは、問題ではないかな。

津田 それからもうひとつ言われたのは、学部や大学院で外書講読しても読めないというんですね。しかし始めから読めるわけではないので、それは何よりも専門用語の問題なんです。ですから短いペーパーのようなものを一つでも読み通せばそこから先はずっと楽になるはずなんです。だから僕は、学部でも、例えば通常の物理や数学の授業に、短い外国語の論文をお使いになったらいいと思うんです。いまは、通常の授業と語学というものが学部段階では完全に切れているのではないのでしょうか。

蛭名 語学教育に関しては、テストで単位を

与えるということは不可能なんではないでしょうか。語学に関しては、何時間費やしたかよりも達成度のほうが重要だということはあると思います。ですから、何かテストのようなものがあるって、それである基準をクリアしたら、卒業に必要な単位とみなすというようなやり方は可能かどうかということなんです。

津田 それに関しても、これまで取り上げられなかったんですが、いまからは平行して考えていく必要があると思います。

宗像 外書講読しても読めないというお話ですが、外国語が読めるようになるには何百ページとかいう一定量の読書が必要ですね。でももちろん授業ではそんな量は読めない。ですから大学のこの段階で、外書講読に向けて既修外国語たとえば英語を教えるとき、限られた時間内で何が教えられねばならないかという、各専門の概念枠やさらにその基礎にある文化的な概念枠みたいなものだと思うんです。それをちゃんと押さえないもので誤訳の目立つ本がありますが、それは概念枠がちりちりできていないからなんで、こんどの必修単位の改革案にみられますように、そのような枠を教えてもらえるたいへん有り難いですね。

合田 その必修4単位を何に当てるかということに関しては、ぼくはむしろ文法のようなものをきっちりやってもらったほうがいいように思います。1、2年生に外書講読を試みるとわかるんですが、読めないのは、単語とか、概念もですが、何よりもグラマーがわかっていないんです。たとえば未修外国語で、必修5単位を何に当てるかといえば、やはり文法です。そのあとで専門に関するものを読めばいいわけで、必要不可欠ということがあると思うんです。

小川 ドイツ語に関して言えば、2年の講読も、1年でならった発音や文の構造の確認に

費やされている部分が非常に大きいので、それをこえて、いわゆる「教養」ドイツ語にまでいくのは、現在のプログラムでは非常に困難ですね。

#### <大学教育における体育>

天野 大学を高等教育としてとらえるなら、授業としての体育実技があるのはおかしいでしょう。ところが、一般教育や基礎教育も必要であるのだとすると、俄然体育実技は必要になってきます。それは、我々の文化が力を基礎にできているからです。我々が、力をだすことを機械に代行させ始めてから、人間そのものがおかしくなっているといわれます。週に一度くらい、少し汗をかき、大きな力や



声をだす時間が必要なのです。大学にきてまでという向きもあるが、日本では大学の設備がいちばん充実しているのです。それを機能的に活用するには、実技を単位としている今のシステムがいちばんです。アメリカのほとんどの大学では、体育実技はありません。昔はあった。中止した理由は「お金」です。アメリカの学生には鉄棒にぶらさがったり、前転をしたりした経験のない人が多い。実技種目も個人種目に偏っていて、クラブに入らない子はチームゲームをすることがない。うまいへたはともかく、これが体育実技を選択(高校でも)している国の実態です。先ほど単位として云々といったけれど、大学での体育実技は、他の科目と違うところに位置付け

て考える必要があると思うのです。単位制度のなかで考えるから、色々の矛盾があるように思うのです。「必修単位」ではなく「必修」にすればよいと思うのです。

#### <ユニバーシティとしての大学の存続を>

司会 話をもとに戻しますが、大綱化によって大学というものが、制度的な枠組みからかなり自由になるわけですが、それではどのような大学を作っていくかということは、これからはそれぞれの大学に任される部分が非常に大きくなってきますね。そこで大学像といったものをもう一度検討する必要があります。そこで大学改革へ向けて、皆さんにとってのあるべき大学像といったものを語っていただけないでしょうか。

角田 これまでは一般教育を教養部に任せて、そのあとで専門に集中するという形でした。しかしそれはうまく行かなかった。そこで、これはほとんど夢のような話ですが、たとえば主専攻は経済学で、副専攻はコンピュータ・サイエンスであるというようにまったく違う専門を学ぶという形で、広がりのある教育を



するというのもできるのではないかな。そうすれば、各学部どうして教官が行き来するということにもなりますしね。そうしないと、ばらばらのまま各学部がエゴイズムによって動くことになってしまう。これは非常によくないと思うんです。ですから、当然教養部の教官も意識改革せねばならないのですが、学

部のほうも、意識改革が必要なのではないでしょうか。ひとつ僕が心配しているのは、大学のカレッジ化です。このままでは、各学部が完全に縦割りになってしまいか。いわゆる一般教育的なものをどれだけ守れるかに、ユニバーシティとしての大学の存続もかかっていると思います。

#### <「専門」を広い視点から>

**蛭名** 大学は教育機関であると同時に研究機関でもあって、普通専門ということで念頭におかれているのは、たぶん研究のほうだと思うんです。そこで特にさきほどのカレッジ化ということと結びつくのですが、下手をすると、神戸大学は、さまざまな学会の神戸大学支部の寄り合い世帯になってしまう。それぞれの学会の追求するテーマによって学科を分けて、そこでの後継者を養成することのみを追求することになりはしないか。ほくたちは専門というものをもっと広くとらえる必要があると思うんです。つまり何を追求したいかという、僕たち自身のなかからでてくるものを中心にものを考えてみれば、いろんな分野に共通する問題意識が出てくると思うんです。そうすると、専門分野を離れてもいろいろ知



りたいことは出てきますから、そこでいろんな分野が互いに交流できる場は絶対に必要なのです。研究者の側でそのような場を確保するという事は、同時に学生の側に対しても狭い専門分野に閉じこもることなくいろんな

視点や関心を持つバックグラウンドを準備することになると思うんです。

**小川** 知的好奇心というのは、ある程度学んではじめて出てくるところがあると思うんです。かなり訓練や時間を積み重ねてはじめて出てくる好奇心が大部分でしょう。例えば、ドイツでもソーセージ職人は小さなときからソーセージ学校へ通って手ほどきを受けるわけですが、始めからソーセージづくりに興味がある可能性はかなり少ない。それでも制度的な枠のなかでだんだんソーセージに興味が出てくる、わかってくるんだと思うんです。ですから好奇心を育てるためにも、ある程度制度的な拘束は必要ですね。

**宗像** 教育機関としての大学ということ言えば、どのような人間を大学教育によって育てようとするのかが問われねばならないはずですね。僕は、近代教育の理念には、一定以上の水準の見識を以て社会に対することのできる自律的な人間の育成ということが絶対条件としてあると思う。大学がカレッジ化していくまでは、この条件はとうてい満たされえない。だから、概論の話に戻りますが、各学部でこれまでの一般教養にあたるものを縮小再生産するのではなくて、概論は必修にしてそれぞれの学部へ出掛けていって聞くとか、もっと自由な学部間の交流がどうしても必要でしょう。

**大野** 学部間の交流に関してですが、いま神戸大学にいるそれぞれの研究者が、いま何をしているのかがわかれば、そのような交流もできやすいと思うんです。けれどいまはそのような研究要覧や、年鑑のようなものがなくて、具体的な情報がなかなか手に入らない。これは問題ですね。

#### <大学改革の一環としての教養部改革>

**司会** これまで一般的な大学改革についてい

ろいろお話していただいたわけですが、そろそろ神戸大学における改革に絞っていきたいと思います。そこで合田さん、まず話のきっかけとして何か。

**合田** ご存じのように、始めは教養部だけの改革として考えられていて、新学部が一般教養も全面的に担当するということがあったわけですが、途中から全学的に改革していくことになってきたわけですね。ですからこれは学部のかたがたに声を大にして言わなければならないのですが、教養部が無くなったからといって一般教育が無くなるわけではないのですが、教養部が考えるべきことというよりは全学が考えるべき問題となったわけですね。もしある学部がタコ壺化してしまっていて、一般教育を顧みないということになれば、何年後かにその結果は出てくるはずですね。ですからそれぞれ学部が一般教育について真剣に考える必要が出てきたということなのです。すでに個々の専門領域を進めるうえでも、例えば建築と文化人類学といった学際的な協力はますます必要になってきていますね。



**蛭名** 研究者の側でそのような協力があるのは事実です。けれど問題は、学生の側がそのような問題意識や着想を持ったときに、それを生かし得る制度的な場が存在するかということだと思えます。

**大野** 僕はもともと建築の出身で、単科大学でしたから、図書館に行くときと理科系の本しか



置いてなくて、例えば文化人類学などに関しても非常に乏しいんですね。そういう意味ではいま図書館は情報源としては充実しているわけですが、問題は実際の研究者とどれだけ交流できるか、しようとするかという動機づけと制度的な場の保証なんだと思います。例えば建築は、モデルとしてさまざまな他の領域の成果を借りてくることが多いので、ある意味ではユニバーシティ的だとも言えるんです。そのような場が、例えばこれまでの教養部というように固定されないで、大学4年間を通じて、さらに先まで生み出されたら素晴らしいですね。

**蛭名** そのような場として理系のほうでは「科学談話会」というのを何年か前からやっているんです。教養部というひとつの場においてもそれぞれの学科に別れてしまうので、他の学科の人とかなりつめた話をするにはそのような場が必要なのです。その意味では、これからはみな各学部で別れていくときに、学部間をつなぐ催しがあると、学部のいわば「のり」になると思いますね。

#### <教育を制度的にどう評価するか>

**角田** 例えばある講義を聞くためにはこの講義を聞いておく必要があるといった、オリエンテーション、方向付けを与える機関が、大学のなかにきちんと制度的に整えておく必要がどうしてもあると思う。誰かが常駐していて、学生の質問に常時こたえる、それから全

学のカリキュラムに関してもかかわっていくような機関が、現在はありませんからね。

合田 いま「大学教育センター」として計画されているのがそれですね。

角田 それは知ってますけどもね、はじめきれいなピルのプランを見せてもらって、これはいいなと思っていたところが、どうもどんどん縮小されているみたいで。やっぱり行き手がなかなかないということは、皆の目が大学教育というよりは、学会を中心とした専門研究のほうにばかり向けられていることを示しているような気がする。その目をどのようにして大学教育のほうへ向けるかということ、物凄く難しいですね。それはこれまでの制度では、不可能に近い。なぜなら、大学内の教育をどのように評価するか、例えば、非常に良い教育をして、学生から評価されても、制度的にそれは、まったく評価されないわけですからね。いまそれはほとんど教官の良心に任されているわけですから。実際教育というのはしんどいですね。例えば自分の専門に関しては、錆付かせないように努力していれば、なんとかなるんですが、教育については、やる気だして、「今年はいっちょいくか」と気合いを入れてやってみると、大抵失敗する(笑)。教育は甘くないんですな。そこでそれだけしんどい思いをしても、まったく評価されないとなると、やっぱり負担だけということにならざるをえない。

司会 だけどそこで高校までみたい、教頭先生の勤務評価みたいになるとね。

角田 そうなんです。勤務評定は非常に問題がある。そこで僕もよくわからなくなって、最終的にそれは教官の良心の問題だということになってるわけだけれども、その良心も時とともに非常に変動するものですからね。

<「概論」を核に自由な学部間の交流を>



宗像 もしさっき言ったように学年を問わずに専攻以外の概論を必修にするというようになれば、単位のとりやすいところが集まるといような低次元に流れることがなければ、各学部の開く概論は、学生の集まりぐあいでもって何が学生の関心に応えているかを知ることができる、よい手がかりになるでしょうね。でも、いまもコア・カリキュラムとか残ってますよね。どうも、全学の改革という今の改革が、他学部の迷惑にならないように改革しますという昔の計画とごっちゃになっているような気がする。少なくとも、例えばこの「国際文化学部」を充実させようと思ったら、新学部がそのような教養部のしっぽを引きずっていたんでは困ることになるでしょう。既存の各学部にしても、全学共通の概論を開くことで、いつもそこに他学部生が入りしているようにしたほうがいいと思うんですけどね。そうすれば、いわゆるタコ壺化の解消もできるし、学生も、始めから狭い学部に押し込められて外へ出る機会がないよりは、風通しがいいのではないかな。

天野 いま経済学部か経営学部では、他学部の単位をとってもいいというようになっていますよね。それをいくつかは他学部の単位をとれというようにすることでできるんじゃないですか。

角田 とにかくいまは一つのことだけ知っていればいいというわけには行かないんだから。世の中はそれ程多様化してるんですからね。

司会 だから一般教育の代わりに、他学部の授業に出させるということでもいいんでね。例えば、教養の哲学に代わって、文学部の講義に出るとかね。

角田 そうそう。そのためにも、さっき大野さんが言われた、全学のカタログのようなものがあればね、わざわざ概論に限定したり、「専門基礎科目」と銘打ったものを用意しなくても、学部の授業として開かれたものの中からオリエンテーションによって十分選択することはできると思いますね。どうもあの「専門基礎科目」というのは教養部の残滓のような気がするなあ。

<学部における一般教育>

司会 いま「専門基礎科目」の話が出ましたが、それを、専門に移った教養の先生だけが担当させられることになったら、これまでとまったく変わらないことになってしまいますよね。いわゆる教養部と学部の二重構造はまったく解消されないままということですね。

角田 いくら大学改革をやったからといって、基礎的な数学や物理学が必要なくなるということはないんで、そのような授業は続けられていきますよね。そうすると、ではだれがそれを担当するのか、この点に関してきちんと議論しておかないと。

蛭名 その問題は、ある意味で各学部の主体的な決断に任されていると思うんです。一般教養専門の教官を作るのかどうかということ、学部の先生方が一般教養をもやろうという意欲を持っているかどうかを表していることになりますよね。そしてその意欲を持っているかどうかということ自体、その学部がこの先どういう学部になっていくかに非常に関係してくるはずなんです。ですから、一般教育専門というように教官を固定しますよという学部は、はっきりいって自分の将来をあ

まり考えているとは言えないような気がします。

司会 それは結局、各学部の見識に任せるといことになりますよね。

<新学部をめぐって>

司会 それでは最後に、とくにI類の先生方に関係してくる国際文化学部について、問題点などをだしていただければと思います。

合田 既修外国語と未修外国語の間でも、何をどの程度まで教えるかということについていろいろいちがいがあるでしょうし、これからいろいろ調整しなければならないことは多いですね。

けれども、神戸大学全体の改革に、この教養部が火を付けたということは、やはり非常に意義のあることだと思うんです。大学のシステムはどうしても古くなりますから、カバーしていくあたらしいシステムを作り上げるということですから。

そこで問題は、これから作っていく学部でなされる研究は、既存のディシプリンには入りきれないものが多いんですね。先ほど話に出た、大学が各学会の出先機関になるというのと逆の話になってくる。そうすると、それぞれの大講座単位でこの先10年、20年どのような教育成果、研究成果をあげていくかについて、行政上のシステムだけでなく、学問体系のあり方そのものも、もう少しきめ細かにこれからつめていく必要があると思います。大野 改組によって大講座という枠のなかで色々な連携が可能だとして、それでは具体的にどのような形でその連携を作っていくのかをはっきりさせる必要があるような気がします。

ぼくはもともと建築の方にいましたから、教養部へ移ってきたときには、これでいろんな領域の先生たちと話ができると思ったんで

す。けれども、実際には一階上がって研究室を尋ねて話したりとか、実際上の研究協力はないままでしたから、新学部ではそれがどうなるかということです。

小川 まずどういふ学生を作るかということがはっきりしていないと。もちろん研究者どうしのインターディシiplinaryな交流も考えねばならないことですが、それはたとえ個人レベルであれ教養部でも可能だったと思うんです。ですからそもそもなぜこの学部を作るのかということ、どんな学生を作るかという点から、もう少しつめたほうがいいような気がします。

津田 ぼくはどんな学生を作るかというはっきりしたイメージを固定させてしまうのも問題だという気はするんですね。大まかな方向性ぐらいならいいけれども。

天野 新しい学部を作るときには、「どのような学生を作るか」を書かなければいけない。あれは作文として必要なことなのですか。「これこれの学問的知識をもたせる」ではないですか。社会のニーズにあわせると、そんなのは数年で色褪せるし、ましてや人格教育などは我々にはできないし、むかし、教養部改革の話し合いで「全人教育」が語ら

れるとき、いつも違和感がありました。

宗像 少なくともそれぞれの大講座で、そこに所属する人たちが集まって何を教育、研究するのかという明確な像をもつことは絶対に必要ですね。これから、それぞれの大講座にどのような内実を与えていくか、これは我々一人一人の課題です。ですから、発足までに、それぞれの大講座に所属する人は何度となく集まって、具体的にカリキュラムとして現実化していくものを通して自分たちが何を主張したいのか明確にしていかなければならないと思うんです。

合田 それと同時に、各学部の意識改革も必要です。教養と専門の二重構造が無くなつてのち、どのように全体として大学を改革していくか、これは皆で考えるべきことだと思います。

角田 各学部にこれから別れていくとして、我々がそのような各学部の意識改革のきっかけとなればいいのですね。

司会 教養部改革を大学全体の改革としてとらえるためのいろいろな視点も出されて、非常に有意義なお話が聴けたと思います。長時間どうもありがとうございました。



## 教職員研修会の報告

平成2年度 第3回教官研修会 (1991年3月13日)  
講師：芹田健太郎 (法学部教授)

演題：「国際人権について」

### 講演要旨

「国際人権」の問題は我々の足元にある。神戸大学の外国人及び帰国子女など、日本以外の国で教育を請けた学生の編入学の取り扱い方をみると、外国で同等の教育を受けているにもかかわらず、日本人のみを編入学させることは、「内外人平等」の国際法の常識からしても矛盾がある。

「国際人権」は、マスコミの広めた言葉であるが、これは第二次世界大戦後、国際法の分野に登場した考えでもある。それまでの国際社会は均質な(キリスト教、資本主義など)小数の国々で構成されており、「人権」は各国の憲法が規定する「国内管轄事項」として取り扱うことで支障はなかった。ところが戦後、人権は「国際関心事項」になった。それは、経済・社会・宗教などの背景の違う国が独立し、そのそれぞれの存在を認めあう事が常識となってきたからである。

その中で日本は、たとえば韓国籍の学者が大学教授になれない、あるいは、「日本の法律に従えないなら、自分の国に帰れ」(指紋捺捺反対に対する官吏の発言)などという考えが依然として強く、「国際人権」に対する意識が低い状況にある。それは日本が、元の植民地が独立した理由を「当然の権利」ではなく、「敗戦」に求めているからであろう。

第二次世界大戦では戦勝国であったにもかかわらず、歴史的な流れの中で植民地から独立要求を突きつけられ、それを承認してきたヨーロッパの国々の「権利意識」は、論理的と言え。70年代の「全欧安保会議」において、ソ連は国境を持ち出したが、その他ヨーロッパの国々は「人権」を主張した。これが今日の状況を作ったと思える。ヨーロッパでは「人権」はすでに国境を越えているのだ。

日本は実定法として内外人平等をうたっているが、これが、「人権」に及んでいない。国籍が違っても、生活地域においては、内外人平等の社会規約があることが望まれるのだ。この点に於てわが国が門戸を開いたのは、「国際人権規約」を受け入れたからではない。「難民条約」の批准後、やっと、外国籍の者が国民健康保健にはいる道が開けたのである。しかしそれ以上は進んでいない。たとえばアジアの人は駄目だがブラジル二世の職業は認めるといふような(何故こんな変なことになるのかは私には分からないが、政府にも答えがないのではないかと)、血統主義ののりつた国籍法といえるものを、依然として堅持している。法律を作ったり、解釈するところでも変な構造があると思われる。

外人に対する取り扱いを類型化すると、1ヨソもの(敵対関係)として排除する、ヨソ者はいやしい(敵ではないが、ヨソ者はいやしい仕事をする者である)、3敵対はしないが、ヨソ者は排除したほうがよい、4相互主義、5平等主義の五段階が考えられる。現実的には色々の困難があるが、少なくとも4の段階にはなつてほしいのです。

日本では、票にならないからか、政治家はこの問題には手を出さない。また、市民の間でもこの種の運動は「〇〇君を守る会」など、非常に狭いところで進められているだけだ。日本が「国際人権」を考えるのは外圧のあったときだけである。

世界は急速に変わっているし、ヨーロッパ以外の国の指導者の思考も変化している。日本は「ものを言にくい」国になりつつあるようだが、こんな状況では、日本だけが取り残されているのではないかと思える。(以上 文責天野)

## 自治会との交渉記録

- 1月31日 新入生歓迎実行委員長から企画書受理(注1)
- 2月8日 自治会執行委員長から公開質問状受理(注2)
- 2月20日 2月8日付け公開質問状に対する回答(注3)
- 2月27日 自治会執行委員長から要求書受理(注4)
- 3月4日 自治会執行委員長、新入生歓迎実行委員長連名の要求書受理(注5)
- 3月12日 2月27日及び3月4日付け要求書に対する回答(注6)
- 4月1日 自治会執行委員長から意見書受理(注7)
- 4月23日 自治会執行委員長及び六月祭実行委員長から要望書受理(注8)
- 2月24日 自治会執行委員長から要望書受理(注9)
- 4月25日 4月23日付け要望書に対する回答(注10)
- 4月24日 4月24日付け要望書に対する回答(注11)
- 5月14日 六月祭実行委員長から要求書受理(注12)
- 5月29日 自治会執行委員長から要求書受理(注13)
- (日付なし) 六月祭実行委員長から 91六月祭企画書受理(注14)
- 6月27日 自治会執行委員長から要求書受理(注15)

(注1)

企画書

1991年1月31日  
教養部自治会新入生歓迎実行委員会  
委員長

記

以下の通り新入生歓迎行事を実施します。つきましては、休講措置を新入生歓迎オリエンテーションを4月12日(金)、16日(火)の午後2コマ、計4コマについて行うとともに、13日(土)午後の講義について便宜をはかっていただくようお願い致します。

- A: 日程 新歓ピクニック 4/6
- クラスオリエンテーション 4/12、13
- 茶話会 4/17
- サークルオリエンテーション 4/12、13、15、16

B：場所 神戸大学教養部構内を中心に行う予定

C：企画概要

☆；新歓ピクニック

趣旨：入学式を前にして、一足先に新入生に参加してもらい、自治委員会、新入生歓迎実行委員会を中心に、参加を呼び掛けた学内諸団体と共に歩き語る課程で、新入生を神戸大学の一員として歓迎する。またこの機会に新入生が学部学年を越えて良き知人を作る場を提供する。

日時：4月6日(土)

場所：未定

参加人数：新入生 120人、主催者側50人

予算：10万円

☆；クラスオリエンテーション

趣旨：入学まもない新入生を自治会として歓迎し、クラスオリエンテーションを通して、「大学とは何か」「学生自治とは何か」を考えてもらうとともに、新入生に自治会員としての自覚を促す。

日時：4月12日(金)、13(土)

参加人数：新入生全員

場所：B棟中講義室

☆；茶話会

趣旨：入学して間もない新入生と我々が在学生が語り合い、交流することによって、相互理解を深められるような出会いの場とする。

日時：4月17日(水)

参加人数：150人(予定)

場所：生協食堂南側(予定)

予算：15万円

☆；サークルオリエンテーション

日時：4月12日(金)、13(土)、15(月)、16(火)

(15日(月)は昼休みのみ)

以上

(注2) 教養部改革についての公開質問状

教養部長殿

1991年2月8日  
教養部学生自治会執行委員会  
委員長 [署名]

教養部廃止、国際文化学部創設案が神戸大学の教授会で検討されていることについて、私達教養部学生自治会執行委員会では、12月末からその具体的な内容について問い合わせしてきました。そして、教養部当局から、1月10日に1990年3月の教養科学部構想の文書を『今の所これしかない。』と言われて、受け取りました。しかし、1月21日付けの毎日新聞および1月24日付けのKUBCニュースに国際文化に関する内容の記事が掲載され、その後、12月に出ていた新しい文書を受け取りました。12月に出ていた文書を自治会の要請があったにもかかわらず、1月の末まで学生に公表しようとしなかった教養部当局の態度に、学生の意見を聞かず、改革を進めていこうとする教養部当局の姿勢が見られるのではないのでしょうか。

80%以上の学生が立って授業を受けたことがあるなど、現在の教養部の劣悪な勉強状況に対して、多くの学生が不満もっています。そうした学生の声とはかけ離れた所で、教養部の改革がどんどんすすめられています。改革の影響を最も受ける学生を抜きにした教養部改革の進め方を改めるべきではないでしょうか。

以上のことを踏まえて、執行委員会で公開質問状を出すことを決定しました。

以下の質問について2月20日までに文書で回答されることを求めます。

質問項目

一、新学部(国際文化学部)の創設が、マスコミで取り上げられる一方で、教養部の廃止が報じられています。大学当局から受け取った文書では、教養部が今後どうなるのか、また、語学以外の一般教育についてはどうするのか書かれていません。教養部改革で一番かんじんの「一般教育をどうするのか」という問題をどう考えているのか。また、現在どんな議論がなされているのか公表されたい。

一、今後、学生の声を教養部改革案に反映させるために、具体的にどういうことをしていこうと考えているのか。

一、平成4年度から手をつけると報道されているが、現在教養部に在籍している学生の不満(マスプロ、内容上の不満)にこたえるために、どのような対策を考えているのか。

一、今回の教養部改革によって、現在の教養部き勉強条件が改善されるのか。

一、国際文化学部は教養部内につくると言っているが、教養部のどこで授業を受けるのか。

一、現在の教養部は、立ち見授業への不満や事務の人員の不足が叫ばれ、定員増が問題となっているが、その上新学部の200人による定員増に対し、どのような対策を考えているのか。それとも他学部の定員を減らすのか。

以上

(注3) 平成3年2月20日  
教養部学生自治会執行委員会委員長 殿

教養部部長 後藤博彌

回答書

1991年2月8日付けの公開質問状について、次のように回答します。

1. 一般教育をどうするかということについては、調査報告書「教養科学部設立と一般教育の改革」(平成2年3月)の9ページを基本にして、全学委員会(一般教育等カリキュラム調整委員会で検討がおこなわれている)。

2. 一般教育に対する学生の意見については、これまでもアンケートによる調査などをおこなっている。例えば、「昭和61年度 一般教育に関するアンケート調査報告書」]

3. これまで総合科目の開設など授業科目の拡充、少人数教育のための特講の開設、相互乗り入れの実施、チューター制の試行、専門科目の1年前期試行など、一般教育の改善のための努力がなされてきた。教室の増築、施設の充実などに

についても、絶えず概算要求をおこなっており、E棟、F棟、B棟、D棟の増築、LL教室の拡充、パソコン室の設置などを実現してきたが、建物の増築については、学生定員を基準にした資格面積が決まっており、限界がある。

なお、平成5年度から臨時学生定員の削減が始まる見込みである。

4. 全学的に検討されている一般教育(語学、保健体育を含む)の改革の中で、提起されているような問題に対する改善策も講じられるはずである。神戸大学全体としてよりよい大学教育の実現に向けて改革の検討がおこなわれているところである。

5. 「国際文化学部」を概算要求するかどうかまだ決まっていないが、要求することになれば、当然建物の要求もその中に含まれる。

6. 「国際文化学部」の学生定員は未定である。また、それを新規に要求するのか、学内の定員を振り向けるのかも決まっていない。

以上

(注4) 要求書

教養部長殿

1991年2月27日  
教養部学生自治会執行委員会  
委員長 [署名]

下記の内容について、新歓についての交渉の後、教養部当局と交渉を行うことを要求します(詳細は別紙)。

記

- 1、掲示板の増設について
- 2、立ち見授業の解消について
- 3、ロッカーの増設について

交渉要求内容

1、4月にはサークル等が新入生獲得のため、ポスターやビラを大量に張りますが、そのための掲示板が不足しています。壁に張られるのを防ぐためにも掲示板の増設を要求します。

2、現在、教養部には学生が立ち見を余儀なくされる講義が少なからずあります。以前からこの立ち見講義については学生からの不満も強く、学生自治会も実際にアンケート調査をしてみたところ下記のような結果を得ました。立ち見講義は学生の勉強意欲を失わせ、学ぶ機会を奪うものとして早急に解決されなければならない問題です。よって当局に立ち見講義解消のため、カリキュラムの改善などの積極的努力をすることを強く要求します。

<アンケート結果(1/22、総数 58)>

◇立ち見のあった講義

地学、文化人類学、芸術学、音楽概論、生物学など

◇立ち見講義の場合どうしたか

・立ったまま受けた(21) ・帰った(17) ・その場に座り込んで受けた(11) ・その他

◇立ち見授業への意見

・次から授業へ行かない ・仕方がない ・時間や講師を増やしてほしい

・学生の数を考えて教室のわりふりをしてほしい ・疲れるので授業に身が入らない ・その他

3、現在ロッカーは、1学年あたり850程度しかなく、2人もしくは3人に1つ割合で割り当てざるをえない状況です。まず2人に1つの割合で配付できるよう、当局がロッカーの増設を設置場所も含めて検討することを求めます。

(注5)

要求書

教養部長殿

1991年3月4日  
教養部学生自治会執行委員会  
委員長 [署名]

新入生歓迎行事を迎えるにあたって、下記の内容について教養部当局と交渉を行うことを要求します(要求は別紙)。

- 1、物品援助について
- 2、新入生歓迎行事での施設使用について
- 3、入学式で行われる記念講演について

以上

(注5) 要求書

教養部長殿

1991年3月4日  
教養部学生自治会執行委員会  
委員長 [署名]

新入生歓迎行事を迎えるにあたって、必要な下記の物品の援助を当局に願います。

記

- 1、封筒 2600枚
- 2、上質模造紙 4枚入り 10本
- 3、水性マーカー 20本
- 4、ワープロ用インクリボン 20個
- 5、上質紙 20冊

以上

要求書

教養部長殿

1991年3月4日  
教養部学生自治会執行委員会  
委員長 [署名]

教養部学生自治会新入生歓迎実行委員会  
委員長 [署名]

今年も例年どおり、新入生歓迎のため、サークルオリエンテーションを開催することになりました。(12・13・16日の午後、15日は昼休み) つきましては貴部に下記の点につきまして要求します。(内訳は交渉当日)

記

- 1、サークルオリエンテーション開催のための援助。
- 2、B棟前の使用およびステージ設置、拡声器の使用。
- 3、B棟階段横（一階）への長椅子（50脚）等の収容。
- 4、教養部食堂前広場の使用及び楽器等の使用。
- 5、A棟一階ロビー（A-104およびL-102）の使用。
- 6、B棟、L棟、M棟、（ただしLL教室は除く）

以上

要求書

教養部長殿

1991年3月4日

教養部学生自治会執行委員会 委員長 [ ]  
 教養部学生自治会新入生歓迎実行委員会 委員長 [ ]

入学式で新入生に向けて行われる記念講演についてですが、これから4年間の大学生活で何のために学ぶのかということが新入生にとって最も重要な事だと思います。特にこれから社会人になるに当たって幅広い知識を身につけなければならないということで、教養部で学ぶ意義を新入生が知ることとは不可欠だと思います。よって、新入生のために以上のような内容の記念講演を行うことを要望します。

(注6)

平成3年3月12日

教養部学生自治会執行委員会  
 委員長 [ ] 殿

教養部長 後藤博彌

回答書

貴要求書（2月27日及び3月4日付）の交渉につきましては、下記のとおり行う用意があります。

記

1. 日時 3月19日（火） 13:30～15:30
2. 場所 A棟1階小会議室
3. 学生側 教養部学生自治会執行委員会委員  
教養部学生自治会新入生歓迎実行委員会委員
4. 大学側 教養部教授会学生委員

(注7)

教養部改革についての意見書

教養部長殿

1991年4月1日

神戸大学教養部学生自治会  
 執行委員会 委員長 [ ]

一、マスコミでも報道されているように、教養部改革が現在、全国の大学に先駆けて神戸大学で進められています。しかし、学生にはその全容が知られていません。去る2月8日には教養部学生自治会では教養部改革についての公開質問状を出し、教養部当局にこの改革の全容を明らかにするよう求めましたが、教養部長の回答には、この改革が一体どういうものであるのかについて、詳しい事は何も書かれていません。

教養部改革が学生に知らされないまま、進められていることに抗議すると共に、学生にたいして全容を明らかにするよう改めて求めます。

一、この改革は、教授会でも十分に議論されずに、進められているようです。3月19日には学生委員との交渉で、この改革の全容を明らかにするよう求めましたが、学生委員の方々は「知らない、わからない。」と繰り返すばかりで、「教養部長に直接聞いてくれないと仕方ない。」とまで言っていました。教授会でも十分に議論されずに、教養部長を中心とした一部の人々によって、この改革が進められるとしたら、それは教授会自治の否定にもつながりかねないことです。この点からも、この改革をもう一度考え直すべきであると思います。

一、学生の間でも現在の一般教育や教養部について、満足している訳ではありません。私達は、この問題を考えていく上で次のことを根本において考えるべきであると思います。(イ) 今、教養部の最大の問題は立ち見授業などといった劣悪な勉学条件です。ですから、まず何よりも先にこの問題を正面から取り組み、解決すべきではないでしょうか。(ロ) 教養部改革にあっても、学生と教員、職員といった全構成員による十分な討議のうえで、自主的・民主的に取り組まれるべきであると思います。

(注8)

要望書

教養部長殿

1991年4月23日

神戸大学教養部（I）学生自治会執行委員会  
 委員長 [ ]

六月祭実行委員会  
 委員長 [ ]

教養部学生自治会では、今年は6月8日（土）、9日（日）に六月祭を行う予定です。その件に関して、下記のとおり、貴部との交渉を希望しますので、日時を決めていただきたいと思ひます。出来るだけ早い時期をお願いいたします。

記

1. 教室使用について  
 本年は六月祭を6月8日（土）・9日（日）の両日に予定しておりますので、その間教養部グラウンド及びA棟1階・B棟・C棟・C 201・C 301・L棟・M棟・F棟の借用を申し入れます。（LL教室を除く）また、使用にあたりましては、教室備品等に破損・紛失のないよう六月祭実行委員会が管理いたします。グラウンド・B棟間の通路、B棟・A棟間の通路、B棟前駐車場につきましても使用いたしたく申し入れます。
2. 休講措置（自主休講）について  
 六月祭実行委員会の方から、7日（金）の3・4時限及び8日（土）の授業を担当されている教官に自主休講にして

いただくようお願いにあがりますので、ご理解・ご協力下さいますようお願いいたします。

3. 車両入構について  
 六月祭に関する物品運搬の為、6月7～10日の期間、必要となる車両について入構許可をお願いします。入構団体・車種・ナンバーは後ほどお知らせします。なお、入構に際して実行委員会が車両の確認をいたします。
4. 保健所関係書類への署名のお願い  
 模擬店の実施にあたって、保健所の許可が必要とされていますが、許可申請に際し、衛生上の問題等のため教養部長の責任のもとで行わなければならないので、届出書にご署名くださるようお願いいたします。（届出書はのちほど提出いたします）  
 なお、実際の衛生指導・諸注意等の模擬店の監督は実行委員会の方で責任をもってあたります。
5. 宿泊許可について  
 物品の管理に関連して、参加団体及び実行委員会が7日（金）夜・8日（土）夜に構内に宿泊いたしたいと考えておりますので、ご許可下さいますようお願いいたします。
6. 物品援助・育友会の予算援助について  
 六月祭各企画を運営するに十分な歳入を委員会では確保しておりませんので、六月祭運営に必要な物品・予算に関して援助をしていただきますようお願いいたします。なお、物品援助に関しては情報宣伝関係と衛生関係の物をお願いしたいと考えておりますが、具体的な品目については後日提出いたします。
7. 諸物品借用について  
 六月祭の準備・運営に関して必要な物品の借用をお願いします。具体的な品名・借用期間に關しましては後日提出いたします。
8. 第1、第2集会室の使用および第2集会室の電話回線について現在、新入生歓迎のために第1、第2集会室を使用しておりますが、引き続き6月末まで、六月祭運営のために使用させていただきたくお願いいたします。なお、正式な手続きは随時いたします。また、第2集会室の電話回線についても、引き続き使用できるようお願いいたします。
9. その他

(注9)

教養部長殿

教養部改革の全容公開を求めるアピール

1991年4月24日

教養部学生自治会執行委員会  
 委員長 [ ]

教養部学生自治会では、私達の度重なる公開の要求に反して教養部当局が教養部改革の全容を公開せず、非民主的に改革を進めていることに対して強く抗議します。学生委員との話では、「まだどのような改革になるかわからない」ということで学生に知らせられる段階ではないとあって、公開をしていないのが現状です。

私達教養部学生自治会は、そういった状況だからこそ、学生に全容を公開し、積極的に学生の意見を聞き入れて行く必要があるのではないかと考えます。学生無視の態度は結局、学生のための改革ではなく、教員にとって、あるいは文部省にとって都合のよい改革でしかないのではないのでしょうか。教養部学生自治会ではこの問題を考えて行くために、4月20日には日本史の曾根先生を交えて、「一般教養をどう学ぶか」についての話し合いをもちました。今後もこういった企画を進め、全学生の意見を聞き入れ、学生にとってどういった改革が必要なのかを考えていくつもりです。

私達教養部学生自治会は、教養部当局に対して、今出されている改革案を総て公開し、教養部改革に学生の意見を反映させるよう強く求めます。

このアピールに対して4月27日までに早急に回答されるよう求めます。

以上

(注10)

平成3年4月25日

教養部学生自治会執行委員会委員長 殿

六月祭実行委員会委員長 殿

教養部長 後藤博彌

回答書

貴要求書（4月23日付け）の交渉につきましては、下記のとおり行う用意があります。

記

1. 日時 5月1日（水） 17:00～19:00
2. 場所 A棟1階小会議室
3. 学生側 教養部学生自治会執行委員会委員・六月祭実行委員会委員
4. 大学側 教養部教授会学生委員

※開始時間が遅れることがあるので、その場合待機しておくこと。

(注11)

平成3年4月25日

教養部学生自治会執行委員会委員長 殿

教養部長 後藤博彌

貴自治会の1991年4月24日付けアピールについて、本学教養部「改革構想」が別冊の報告書のとおりにまとまったので、教養部の回答としたい。

(注12)

教養部長殿

1991年5月14日

六月祭実行委員会  
 委員長 [ ]

六月祭援助物品要求書

六月祭の運営に当たり、下記の物品援助を希望します。

記

希望物品			
1	マジック (Uni POSCA 8mm:赤, 黄, 緑, 青, 黒×5)	25本	8 ゴム手袋
2	ペンキ (水性) 500cc青, 赤, 白×2	6缶	9 角材 (40mm×40mm×400cm)
3	ポスターカラー	10個	10 角材 (50mm×50mm×400cm)
			11 ベニヤ板 (90cm×180cm×5mm)
			20枚
			5本
			5本
			20枚

(600cc:白,青,赤,黄,黒×2)	12	オスバン希釈液(殺菌消毒用)	30本
4 はけ	10個	13 せんたくのり	10個
5 中質紙 B4	40000枚	14 ビニールシート 1m×20m透明	1枚
6 リソグラフィ用マスター (理想科学工業、270×465mm 200枚入)	2個	15 雨ガッパ(簡易)	40枚
7 リソグラフィ用インクD (理想科学工業、印刷用、黒、エマルジョン、400cc)	10本	16 ガムテープ	10個

調整は下から行って下さい。  
1～8は早急をお願いします。

以上

(注13) 要求書

教養部長殿

1991年5月29日  
教養部学生自治会執行委員会  
委員長

教養部改革が進められている中で、この改革に学生の要求を反映させるため、また現在の学生の状況を改善していくために、以下の事を中心に交渉することを求めます。

- 1 立ち見・食堂の混雑といった劣悪な勉強状況の改善の問題。
  - 2 一般教育や授業についての今度の改革でこれらがどうなるのか、また学生の意見をどう反映させていくのかという問題。
- なお後日一言カードや現在行っている授業に関するアンケートの集計等をお渡し致しますのでぜひお読みください。  
また交渉の日時は来週の前半か、あるいは六月祭後、早い時期にお願い致します。

(注14) '91六月祭企画書

六月祭実行委員会  
委員長

六月祭を以下のように行いたいと思います。

- (1) 六月祭基調
  1. 六月祭は、教養部新自治会員である1回生の自治活動への主体的参加の第1歩として位置づけ、今後の自治会活動を展開していく、一つのきっかけとなるものにします。また、1回生への新入生歓迎の、最後で最大の行事として意味合いもあります。
  2. 六月祭は、学生の多様な要求を、学生自身の力でくみ取り、作り上げていくことを一つの目標とします。
  3. クラス・サークルから企画参加することにより、各クラス・サークル内の団結・親睦を深め、自治会活動・大学生生活をより充実させるためのきっかけとしても位置づけられます。したがって、全教養部生が何らかの形で六月祭に参加することを目指します。
  4. 六月祭を、単なる『祭』として終えることなく、以後の自治会活動に、より創造的で前進的なものを加えていけるように位置づけます。
  5. 六月祭を、学術文化活動を中心とした学生の諸活動の発表と交流の場とします。
  6. 大学が開かれたものであることを自覚し、大学と地域・来場者とのよりよい関係を模索します。

- (2) 企画内容
  1. 模擬店(屋外・屋内)  
屋外及び講義室を用いて、サークル・クラス単位で模擬店を実施します。
  2. 室内企画  
講義室を用いて、展示・映画会・講演会などの企画を、サークル・クラス単位で行います。
  3. 実行委員会企画  
映画会と講演会を予定しています。
  4. ステージ企画  
第1ステージ(A棟一階テレビ前)では、アマチュア・バンドコンサートをを行います。また、第2ステージ(B109・110前)では、クラブ・サークルなどの発表やバラエティ企画を行います。音量については、周辺地域への影響を特に注意して、機材の操作にあたります。

(注15) 要求書

教養部長殿

1991年6月27日  
教養部学生自治会執行委員会  
委員長

教養部改革について、6月27日に開かれる全学評議会の内容について、早急に学生に公開されることを要求致します。公開につきましては、その日時、方法等を近日中にお知らせ下さいませよう要求いたします。また、全学評議会で決定された詳細について、早急に学生自治会に文書でお知らせいただくよう要求いたします。

以上

## 第二課程関係の話合いの記録

3月7日 新入生歓迎行事に関する要求書受理(注1)  
3月11日 上記要求書に関して新入生歓迎実行委員会等と話合い。(資料なし)  
(注1)

要求書

1991年3月7日

神戸大学教養部長殿

神戸大学教養部第二課程新入生歓迎実行委員会  
実行委員長  
神戸大学教養部第二課程サークル連合委員長

我々、新入生歓迎実行委員会は新入生と在校生との交流、そして新入生に一日も早く神戸大学に馴染んでいただくことを目的とした新入生歓迎行事の一環として、合同コンパ、スポーツ大会を企画しております。  
これらの行事に対し、委員会は下記の休講措置、予算、現物支給を要求します。  
なお、交渉日は3月11日(月) 19:00を希望します。

記

1 日程について			
4月12日(金) 合同コンパ		4月17日(水) スポーツ大会 第1日目	
4月16日(火) スポーツ大会 第1日目			
2 休講について			
4月12日(金) 第2時限目		4月17日(水) 第2時限目	
4月16日(火) 第2時限目			
上記の休講措置をお願いします。			
3 予算について			
合同コンパ費用	290,000円	諸雑費	50,000円
パンフレット『野草』作製費	30,000円	計	410,000円
スポーツ大会費用	40,000円		
4 予算援助について			
上記(予算について)のうちから教養部に対し280,000円の援助をお願いいたします。			
合同コンパ費用(訓育指導費から)	200,000円	諸雑費	50,000円
パンフレット『野草』作製費	30,000円	計	280,000円
5 現物支給について(省略)			

平成3年3月8日  
神戸大学第二課程新入生歓迎実行委員会

実行委員長 殿

神戸大学第二課程サークル連合

委員長

教養部長 後藤博爾

回答書

貴要求書(3月7日付)の新入生歓迎行事にかんする話し合いについては、下記のとおり回答します。

記

日時 3月11日(月) 19:00~21:00  
場所 A棟小会議室  
出席者 第二課程委員(現および新)  
第二課程新入生歓迎実行委員  
第二課程サークル連合委員

以上



### 編集後記

5月には同僚の中川保雄さん（自然科学史）が亡くなられた。同世代の者には、ポツカリと胸に穴があいたような痛みが残る。故人のご冥福をお祈りしたい。

教養部「広報」があと何号つづくか知れないが、最終号は我々4人の新委員が担当することになるかもしれない。今号は大学改革を特集に取り上げた。超多忙の中を原稿をいただいた瀧上さん、座談会に出席していただいた方々に感謝申し上げます。「大綱化」によっていよいよ大学は変革の時期を迎える。戦後の新制大学発足からすでに40年以上も経って

いるのだから、改革もむしろ遅きに失したといってもよいであろう。教師の方はこれまでの研究体制の侵されるのをおそれて、現状にしがみつき、一方、学生の方は少しでも楽な方向に傾くあまり、キャンパスはレジャーランドと化する。これは停滞どころか、底なしのぬかるみにはまっけてもこれに気づかないようなものだ。しかしまだ救いの可能性はある。今のこの時期は、教師にも学生にも、自分自身にむかい合うよいチャンスかもしれない。

(T. H)

神戸大学教養部広報 No.79

平成3 (1991) 年 10月15日発行

発行 神戸大学教養部  
〒657神戸市灘区鶴甲1

編集 神戸大学教養部広報委員会

委員：橋本 隆夫 国友 正和  
河辺 章子 宮田 眞治

印刷所 株式会社 旭成社 TEL 078-222-5800  
FAX 078-222-8559